
ろくろ首が荒ぶっている

ろく

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ろくろ首が荒ぶっている

【Nコード】

N9528V

【作者名】

ろく

【あらすじ】

時は江戸（仮）

所は江戸（仮）

ある長屋に住まう扇屋が、はた迷惑なあやかしどもに、ひたすら迷惑をかけられる話。

扇屋は珍しく上機嫌であった。

扇の骨を作るも扇の地紙を梳くも、地紙に絵を描くも扇を売るも扇屋と言えるから、この男だけを扇屋と呼ぶには相応しくないのかも知れぬがそれはさて置き、扇屋は鼻歌まじりに筆を地紙に滑らせていく。

今日は思うようにすすいと筆が進んだ。雇い主である馬鹿旦那……いや、若旦那から妖怪の扇絵を描くように言われているのだが、これが面白いように筆が進む。

「よっし、完成！」

最後の一枚が出来上がった。後は乾かしてしまえば完成である。

即席の鼻歌を奏でつつ、扇屋は筆を置いた。

うん、と伸びをする。気がつけばもう夜だ。ずっと夢中になって描いていたらしい。そういえば腹が空いた気もするが、その空腹すら扇屋の満足感を助けるようだ。

頼まれていたのは五枚。可能な限りおどろおどろしく描いてくれ、との事だった。何でも、この夏の暑さを吹き飛ばせるくらいのおどろおどろしさが良い、と。

その期待に応えようと思ったわけではないが、扇屋は、それはもうおどろおどろしく妖怪絵を描いた。日ごろあやかしどもに迷惑をかけられて溜まった鬱憤をぶつけるように、それはもう、とてもとおどろおどろしく描いてやった。

描いたあやかしどもは、本当は舌も長くないし一つ目ではないし、うろこも無いし牙も生えていないし、耳も尖っていないし指も六本ではないが、扇屋は誇張しまくった。

普段から迷惑をかけられている礼だ。これを見た人々に怯えられ厭われ、キヤーキヤー言われてしまえば良いのだ。

そうだ、今日もいつものごとくあやかしどもに迷惑をかけられたのだ。

昼間には盗み舐めた油の礼　扇屋にとっては迷惑でしかないのだが　に、と猫又が雀を置いていったのだが、この雀、まだ息があった。埋めてやろうと扇屋が手を伸ばした途端、目を覚まして部屋中をばたばたと飛び回ったのだ。

どうにかこうにか外に出してやったものの、そのおかげで部屋は荒れきってしまった。もとより荒れた部屋なので、そう変わりは無いのだが。

夕刻には、豆腐小僧が訪ね来た。どれだけ追い返そうとしても暖簾に腕押しで、豆腐小僧は結局なおも扇屋の長屋にいる。今は、徹底的に無視を決め込む扇屋に拗ねたのか、豆腐小僧は扇屋の煎餅蒲団を奪って不貞寝していた。しかしいつの間にもやら、すびよすびよと呑気な寝息を立てて眠りこけている。

だが、それもまあ良いかと思えるほどに今の扇屋は上機嫌であった。それ程に、妖怪絵は納得のいく出来であったのだ。するとだ。

どん。

どん。

と、長屋の戸を叩く音がした。

嫌な予感しかしなかった扇屋は、無視を決め込むことにした。が、音は続く。

どん。

どん。

叩く、というよりも、ぶつける、といった方が良いかもしれない。何か重いものを戸にぶつけているような、にぶい音だ。

やがて、その音に合わせるようにして、女の声が聞こえてきた。どん。

うらめしや。

どん。

あなうらめしや。

どうしよう。本当に嫌な予感しかない。

「うらめしやあああああ!!」

「ぎゃあああああ!!」

バリインと派手な音と共に戸は壊れ、代わりに女の顔が生えた。

「さつきからうらめしやうらめしや言ってるじゃない! 無視してんじゃないわよクス!」

「めっちゃ血い出てるけど!??」

飛んできた木片を避け、扇屋は頭突きで戸をぶち破った女を指差す。

女は額からだらだらと血を流していた。そりやまあ、人の家の戸に頭突きを繰り返していたらかち割れもするだろう。

「あのねえ、女がうらめしやうらめしや言ってる泣いてんのよ? 優しく慰めるのが男の役目なんじゃないの?」

「人ん家の戸を頭突きでぶち破る女を慰められるほど、俺の懐は広くねえよ?」

「うるっさいわね、とにかく慰めなさいよ。あたしは傷ついてんのよ」

と、女はおいおいと泣き始めた。

「あーもー、うっぜえ……」

嫌な予感的中だ。扇屋は木片を拾い上げ、ぼいと適当な位置に投げ捨てる。

普通に頭突くだけでは戸は破れないだろう。多分。やったことがないから分からないけど。

それでも破れたのは、女が長い長い首を振りかぶり、戸に頭を打ち付けていたからだろう。

ろくろ首は扇屋の慰めを期待しているのか、泣きながらこちらにチラチラと視線を寄こす。鬱陶しい。

扇屋は舌を打って、極力目を合わせないように顔を背けた。

「さっさと巢に帰れよ、うぜえ」

「でも今あたしが首抜いたら戸に穴開いちゃって、ほら、隙間風とか気になるじゃない？」

「その気遣いが出るならどうして頭突いた」

「ほんともう最悪。あの馬鹿入道、あたしの首が長いのが嫌だとかいきなり言い出して。だったら何で付き合おうとか言い出したのよ」「聞けよ」

「もう少し短い方が可愛いよとか言われても、どうしようもないじゃない。あたしの首が長いことなんて最初から分かってたじゃない。それが嫌なら、何で付き合おうとか言うのよお」

「嫌なら別れりゃ良いじゃん」

「そういう問題じゃないのよ！」

にゆうと首を伸ばし、ろくろ首は扇屋の眼前に迫ってくる。

「あんたほんと何も分かってないわね！　こういう時はとにかく話を聞いて、かわいそうだねつらかったねって慰めれば良いのよ！

否定も肯定も求めてないの！」

「肯定求めてんじゃん」

「うるさい！　とにかくあたしは傷ついてるの！　何でもいいからさっさと慰めなさいよクズ！」

と、ろくろ首は胸を張る代わりに首を反らして扇屋を見おろした。扇屋はぼさぼさの髪を掻いて更に乱し、大きく嘆息した。先程までの上機嫌は、既に彼方まで吹っ飛んでしまっている。

「そういうクズクズ言ってくることが、見越し入道も嫌だったんじゃないの？」

「みこたんには言わないわよ」

「みこ……、……キモッ。おま、もうすぐ三百歳アラサーのくせして気持ちわるっ」

「何ですって？」

ろくろ首はカッと目を剥き、首を伸ばしてくる。ぐるぐると扇屋の体を締め付けた。

「それを言われたらもう戦争しかないのよー！」

「いだだだだ痛い痛い痛い離れる暑苦しい!!」

「……んー、どうしたんすか扇屋の兄さん……」

むにむにと寝ぼけ眼を擦りつつ、豆腐小僧が体を起こす。そして、ハッと息を呑んだ。

「……何たる情事……!!」

「情事じゃねえよ!」

「ば、ばか!! 何言ってるのよ!! やめてよもっ!!」

首を引き剥がそうとしていた扇屋だったが、ろくろ首が顔（と首）を赤らめて、明らかに動揺した様子な事に気付き、首を傾げた。

「もう、やだ、恥ずかしい……」

ろくろ首は拘束を緩め、扇屋から離れた。何だこれは。

「ひゅーひゅー、兄さんひゅー」

「黙れ小僧!」

離す豆腐小僧を一喝し、ろくろ首の様子を窺う。ろくろ首は真つ赤な顔でもじもじと首をゆらゆらさせている。何だこれは。

「あ、あたしは、そんなんじゃないんだから……。誰にだって巻きつく首軽女じゃ、ないんだからね……」

首軽女って何だ。

「で、でも。あんたがどうしてもって、言うなら……」

チラ見すんな。

何だ。どうしてもって言うなら何なんだ。キャッ言っちゃったとかつてもじもじしてるけど、全く意味が分からない。とりあえず豆腐小僧は黙れひゅーひゅー言うな。

何だこの空気は。何かフワツとしててすごく嫌だ。

扇屋が逃げだしたいと思っていたその時だ。ズウンと地を揺らすような、大きな音が響いた。

「みこたん……?」

息を呑んで、ろくろ首が戸から頭を抜く。隙間風が吹いた。

「ろんろん! 俺が悪かった!」

「みこたん!」

みこたん。

ろんろん。

……頭の頭痛が痛い。

「ごめんな、ちよつと、甘えちまつてたんだ……。お前が側にいるのが当たり前すぎて……。馬鹿だな、俺……」

「うっん、みこたんは悪くない！ あたしが悪いの！ あたしの首が、みこたんの理想の首の長さじゃないから……」

「違う！ 俺が悪いんだ！ ごめんな、ろんろん……！」

「みこたん……」

「ろんろん……」

「みこたん！」

「ろんろん！」

扇屋は戸の穴から外を覗き見る。雲突くほどの大入道に、ろくろ首はその首を伸ばしてぐるぐると巻きついていた。

同じく穴から二人を覗き見しつつひゅーひゅー囃していた豆腐小僧が、ふいに何かに気がついたように目を丸くして、扇屋を見ている。

そして妙に優しい目をして、ぽんと肩を叩いてきた。

「……女は、ろくろ首だけじゃありやせんぜ……？」

「何で俺がふられたみたいになつてんの？」

「星の数ほど、女はいやすよ……」

「その目をやめろ」

扇屋は豆腐小僧の頬を思い切り抓った。

外ではまだ「みこたん」「ろんろん」の応酬が続いている。

とりあえず、ろくろ首と見越し入道の二人は、更におどろおどろしく描いてやろうと扇屋は心に決めるのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9528v/>

ろくろ首が荒ぶっている

2011年8月20日03時17分発行